

対人援助論からの保育試論

—「見ること」から「見えること」への対人援助に関する一考察—

市 東 賢 二

Shito Kenji

要 旨

対人援助、つまり人間に対する援助ということへの問題意識は、およそ人とかかわり合うことを主たる専門性として掲げる様々な領域の学問において、主要なテーマとされている。そのことは幼児教育および保育という分野においても例外ではない。こうした問題意識は、単に対人援助の技術や方法を問題にしているというよりは、対人援助における人間関係そのものを問題化すること、つまり対人援助の態度の問題として焦点化されつつあるといえる。

対人援助における態度の問題は、保育という領域において「みる」ことを問い返すことによって明らかにされる。本論は「みる」ということを問い返すことによって、「みる」とはどういうことかを明らかにすることを目的とする。さらに「みる」ということを問い返すことによって保育そのものの内容へと迫ってみたい。

キーワード：能力：ability, capacity みる - みえる 主観の客観化 リアリティ
アクチュアリティ

はじめに

保育という領域は、その対人関係上の特質として保育者と乳幼児との関係という援助関係から、保育者=見る側、乳幼児=見られる側として捉えられがちである。しかし、「見る—見られる」相互性や共時性は既に対人関係や対人援助論における緒論に述べられている。例えば保育者教育の中で語られる「子どもの視点に立って…」や、「子どもの世界を理解する」等の言説からも伺うことができる。しかしそこでは、ともすれば上記とは逆の設定をし、乳幼児を見る側として、「見る乳幼児」を保育者が第三者的な立場から、いかにそれを理解しようとするかという視点に縛られ過ぎてはいまいか。こうした視点はその基盤として「見る保育者」、「見られる乳幼児」という構造を相変わらず持ち続けている。

こうした中で語られる「見る」ということがらには、見ようとすれば自ずと見えるということが暗に含まれてはいないだろうか。このことは、「理解する」という表現についても言えることであるが、現実的な困難とは裏腹に簡潔に表現されてしまっていないだろうか。これらのことから、もう一度「見る」ということの意味を捉えなおす必要があるだろう。

また、こうした保育者と乳幼児との関係は保育者—乳幼児、保護者—乳幼児といったような限定された関係のみを捉えるのではなく、むしろ乳幼児を関係へと開いていく保育者として捉えることが必要であろう。それは、関係を生きることとしての保育であるといえよう。

以上のような視点から、本論文では、保育という領域における対人援助の人間関係や態度の問題を、「見る」ということの意味から明確にしていくことを目的とする。

1. 能力としての「見る」こと

— abilityとしての能力と capacityとしての能力—

「見る」ことについての能力を理解する方法は、まず視力検査に代表されるような視覚の機能的理解である。さらには、なぜ見えるのかという問題を空間論的な視点から問うことも既に長い歴史を持っていると言えるだろう。こうした議論の中心的課題の一つは、見ることが「できる」ことへの問いであるといってもよいだろう。しかしながら視覚の機能的理解は既に精神盲等の症例により、それがあたかもカメラのレンズのように理解され、再現されたとしても「見る」ということと必ずしも合致しないことが報告されている。もちろんそうした機能的理解を完全に否定することはできない。しかし、それだけでは理解しきれない「見る」能力を理解しようとしなければ、「見る」ということを理解したことにはならないだろう。

能力ということを問う際には、まず能力を2つの側面から捉えることが必要になるだろう。1つ目は、いわゆる自然科学主義的理解における知のあり方であり、それはabilityとして概念化できよう。このabilityとしての能力はある種の還元主義によって導かれることが少なくない。それは、一部の現場主義者に見られる「やればできる」、または「私はできている」式の体験主義などは代表的な例と言えるだろう。2つ目は、対人的、臨床的な知のあり方であり、capacityとして概念化できるだろう。例えば、合衆国の精神科医であったフロム＝ライヒマンは精神療法家の人間的職業的な基本的な資質を述べる中で、「精神療法家は聴くことができなければならない。」(F. フロム＝ライヒマン 1963 p. 75)としている。このことは、当然のことであるが、その精神療法家の耳が聞こえるか聞こえないかという意味での聴く能力への言及ではないことは明らかである。フロム＝ライヒマンは続ける。「聴くことができるということ、および他人のいうことをそれ自体としてうけとり、おそらく邪魔になるようなしかたでしか思い出されない、自分自身の問題や経験の線に沿って反応したりしないことは、特別に訓練されないかぎり、ほとんど講も実践しえない対人関係のわざ(アート)である……略……したがって、自分の生活における不満と不幸の源泉へむけられた自分の態度を、はっきり掴まなければならないし、自分の情緒的安定や、患者に聴きいるように集中する能力の妨げにならない程度において、それを統合しなければならない。」(同上) こうしたことは、精神療法家のみに限られたことではない。ここでフロム＝ライヒマンによって「聴く」として表現された能力は「他人のいうことをそれ自体としてうけと」る能力である。このことはすべての対人援助にかかわる専門職に必要な能力であろうと思われるが、ここでいわれる「聴く」という能力は、間違いなく対人的能力としてのものであって、いわゆるできるかできないかに還元可能なabilityとしての

能力とは区別する必要があると考える。

abilityとしての能力がその判断根拠を自律的な判断によれば（例えば視力検査のような計測）、capacityとしての能力はその判断根拠を関係的判断による。例えば、人間の目や耳は、カメラが被写体を余すところなくとらえるように見えることはないし、録音機械のように音という音の総てを聞ける訳でもない。つまり人間の能力という意味では、絶対的に発現されたcapacityはあり得ないということである。しかしながら、絶対的な無として発現されることは往々にしてあるものだ。それは例えば、対人援助職につく熟練の者でも、初心者であっても、見ることのabilityが発現されている以上、何も見えていないというのは、多くの場合誇張された言い方になろう。どちらもその点においては見えている。しかし、熟練した者の見えるものと、初心者の見えているという状態には、やはり大きな違いがある。対人的な能力において、熟練したものを基準にすれば、初心者はやはり見えていないのである。見るということ自体が、じつは体験的に学び、身につける能力であるということは、メルロ＝ポンティの所論にも述べられている（後述）。こうしたことは、見れども見えずのこととして初心者にとっては、苦痛の種でもあることであるが、このcapacityとしての見るという能力は、まさしくその訓練された度合いによるとも言える。当然のことであるが、ここで述べる熟練の度合いは、単に経験年数といったようなことがらではない。年数的なものが全く関係無いとは言い切れないが、極論すれば、経験年数が長くても現実が見えていないことは、ままたあることである。それは、あくまでその訓練の度合いであり、それはまた、現実世界へのコミットメントの訓練によると言えるだろう。

2. 対人援助論における「見る」こと

対人援助という問題において、「見る」ということは、前節で見た通り単に視力の有る無しや、いわゆる眼がいいとか悪いとかいうことに限らない。しかし、「見る」ということが問題にされる以上、ある事物がみえているかどうか問われていることも確かである。つまりある事物やことがらが誰にでも「みえる」ということが現実であるのかどうかを確認する必要がある。この場合注意しなければならないこととして、客観性の問題が上げられる。つまりある事物やことがらを「見る」ことができるということが客観的なことがらであるのかどうかを問い返す必要がある。さらにそこで問われる客観性とはどのようなことであるかを問い返す必要がある。

早坂泰次郎はこうしたことについて次のような事例を挙げている。「発語障害を伴った老人性痴呆の患者がいる。この人はしばしば尿失禁をするので看護婦たちの頭痛の種だった。ところが十数名いる病棟ナースのうち、若いスタッフ・ナースの一人だけは、失禁させたことがなかった。彼女が勤務している時には、いつでもあわや失禁という直前に尿器があてがわれるのだった。婦長や他の看護婦たちにはどうしてなのかわからなかったが、ある日婦長が尋ねてみるとこの若い看護婦は答えた。『アラ……だってあの患者さんいろんなサインを出していますもの。』若い看護婦のいうサインはしかし他の誰にも見えないものだった。」（早坂 1991 p. 30）

早坂の挙げたこうした事例は、対人援助における「みる」「みえる」ということが単なる主観主義的な知覚に終止しないということを表している。「みる」「みえる」ということが、その当人の主観的な問題でありながら、そのことをあえて見逃し、誰にでも確実に「みえる」というように客観性を帯びたことがらとしてのみ承認されるのであれば、上に出てくる若いナースは勘違いをしているか、常人にはみえないものをみていることになる。しかし、このナースはそのみえたことに応じて老人の失禁をケアしている。「みる」ことの客観性の問題は、主観に対する客観という概念だけでは理解し得ないものなのである。客観性そのものを万人に共通するような与件として扱うならばそれは、客観主義に取り憑かれた、いわば転倒した主観主義によると言わざるを得ない。

「みる」ということを扱う場合、その前提としてあくまでそれは個人的な知覚の問題であって、特別な場合を除ききわめて主観的なことがらとして扱うことが暗黙のうちに了承されている。だからこそ、専門的な観察（参与観察）においては、そうした主観的な知覚にとどまらず、客観的なデータとして取り扱うことが要求されるようになる。つまりここでは主観的なことがら（主観）と客観的なことがらは（客観）は正反対の現象として扱われている。しかしながら、ここで求められる客観性とはどういうことだろうか。たとえば万人に共通に与件されるような客観性とはなんだろうか。このことは人間の発達段階を考える際にも同様のことが言える。保育場面を例にとった場合、発達段階として何ヶ月の乳幼児は何ができる、何歳の乳幼児は何ができるといったようなことが段階的に語られるが、現実の場面においては、個々人の発達に応じてその限りではないことは明らかである。それは身体的発達に限ったことではなく、世界への対応（適応）においても同様である。実際の保育現場においては珍しくないことであるが、保育所で長年勤務している保育士の前にいる時の幼児の様子と、現場に入りたての保育士や実習生の前にいるときの様子では同じ幼児でありながら明確に差がある。ここにはどのような客観性があるのだろうか。ここで見られる差は、観察者の主観でありながら客観性を帯びている。むしろここでの差は客観化された主観として捉える必要があるだろう。なぜならば、その差を厳密にデータ化する基準はなく、あくまで観察者の主観が相互に共有されることによって客観化されているのである。

広辞苑によれば、データとは①立論・計算の基礎となる、既知あるいは容認された事実・数値。資料。与件。②コンピュータで処理する情報のことである。ここの①のなかに「既知あるいは容認された事実」という言葉が見えるが、これを元に幼児とは相手に応じてその態度を変えるものだと決め付けてしまえば、それは単なる偏見であって、資格を持つ以前に保育者として乳幼児に関わる態度としては問題がある。乳幼児の発達を「みる」とは、偏見に当てはめて「みる」ということでは決してなく、その乳幼児の世界の発達に応じるということではしかあり得ない。つまり、ここで問題にされている「みる」とはabilityとしての「みる」が問題にされているのではなく、capacityとしての「みる」が問題にされているのであり、アクチュアルⁱな体験としての「みる」である。このアクチュアルな体験を精神医学者の木村敏は、その時間的様相に関して次のように述べている。少し長くなるが引用してみる。

リアルな時間は一本の流れとして表象される。この流れの上に未来・現在・過去が順々に並んでいる。しかもそこには前後関係があって、前から後ろへと時間は絶え間なく経過している。このような時間は世界の全体を—わたしも他人も、こころも事物も—瞬時の途切れもなく一様な速さで一方向へ運んでいる。この止まるところのない流れのなかでは、わたしは現在という時点を決して捕まえることができない。現在は未来と過去の移行点として「要請」されるだけのものであって、現在を経験したと思ったその瞬間にそれはもう過去になっている。リアルな時間の現在は経験不可能である。

これに対してアクチュアルな時間では「いま」の生き生きとした存在がすべてである。昨日の事件も明日の予定も、アクチュアルな時間のなかではいまのわたしの思い出でありいまのわたしの期待である。アクチュアルな「いま」の時間において、わたしと世界とは完全に膚接している。というよりも、アクチュアルな時間が生成するのは生きて行為するわたしが世界と接触する境界面においてでしかない。そしてこの境界面では「いま」の時間と「わたし」という行為主体が完全に一つのものとして生きられている。(木村 2000 p. 16-17)

この木村の指摘は、アクチュアルな体験がその時間的意味において万人に共通に与件されるといった意味での客観性としての体験ではありえず、絶えず生き生きとダイナミックに流動し続ける生きられた体験を表している。つまり、乳幼児の発達が「みえる」ということは、その都度その都度観察する者が乳幼児の「いま」へ「わたし」としてコミットすることによって「みえて」いるのである。その意味で、ここで問題としている主観とはもともと相互主観的な主観であり、間主観的な問題であるといって差し支えないだろう。またさらに複数の観察者によってみられた(共有された)乳幼児の発達についても同様である。相互に主観的である「みえる」体験が共有されることにより、共同主観化されたのである。こうした一連のプロセスは、主観が客観化されることを示しており、対人援助における「みる」「みえる」とはこうしたことを指すのである。

3. 「見る」ことから「見える」こと、「気づく」ことへ

前節までに見てきたように、「みる」ということには通常の日常生活においてはほとんど問題にされないが、対人援助において重大な問題が含まれている。それは、「みる」ということは当然主観的なことがらであるが、専門職者にとっての「みる」とは、それ自体自明のことがらとして当人のみに完結する知覚ではなく、つねにそれが間主観的なことであるかどうかを問い返されることがらであった。

こうしたことについて、M. メルロ＝ポンティは「幼児の対人関係」(M. メルロ＝ポンティ 1966)のなかで古典心理学のもつ「心理作用とか心的なものとは、当人のみに与えられているものだ」(同 p. 129)という偏見を批判しつつ、「私の意識はまず世界に向い、物に向っており、それは何よりも<世界に対する態度>です。<他人の意識>というものもまた、何にもま

して世界に対する一つの行動です」(同 p. 133)と主張する。このことは、本論に即していえば、「みる」ということが見れば見えるということではなく、自らの<世界に対する態度>によって表れた、世界に対する行動なのである。つまり「みる」ということ自体が「周囲の空間やその主な諸方位とのいろいろな関係を含んで」(同 p. 135) いるのである。「自己や他人というものが、絶対に自己意識的なものであって、両者は相互に絶対的の独自性を主張し合うものだ」と初めから仮定してしまえば、もう他人知覚を説明することはできなくなってしまうだろう、と。反対に幼児がまだ自己自身と他人との区別を知らない状態の時でさえ、すでに精神の発生が始まっているのだと仮定すれば、他人知覚も理解できることになる」(同 p. 136) のである。さらにいうならば、一般的な理解として「みる」と「みえる」を比べた場合、「みる」という一般的な行為の上に「みることが出来る」という能力としての行為があると理解されがちである。しかし繰り返し述べるとおり、そこでの「みえる」とはあくまでabilityとしての「みえる」であって、「みることが出来る」という以上の何物でもない。極言すれば能力的に備わっているかどうかの問題であって現実的な体験として「みえて」いるかどうかは定かではない。capacityとしての「みる」を問題とする場合こうした理解を根底からひっくり返す必要がある。つまり、「みる」が「みえる」に先立つのではなく、「みえる」が「みる」に先立つのである。これは上述したメルロ＝ポンティに明らかであるが、乳幼児の発達において乳幼児が「みよう」と努力することによって「みえる」ようになる訳ではなく、乳幼児は体験的に「みえる」からさらに「みよう」とするのであるし、だからこそ「みる」のである。

ここで注意しなければならないことは、われわれは日常的な体験としては意識的にそういうプロセスを踏まないということである。たとえば、道を二人連れが歩いていたとしよう。片方のAさんが途中で道端にきれいに咲く花を見つけて、隣を歩いていたBさんに「あその花きれいだね。」と言った。当然そう言われたBさんはその花がどこに咲いているのか探す。なかなか見つからず、目を皿のようにしてようやく見つけた。そんな場面を想像してほしい。似たような場面を体験したことがあればすぐわかることであるが、われわれの日常的な体験ではBさんのように花を探そうとして「みよう」とする。その結果友人と素敵なお花を共有できるのであるが、ここでは「みる」が「みえる」に先立っているように思える。ここで問題となることは、Bさんのように誰しもが努力すれば、つまり「みよう」とすれば必ず「みえる」ということではない。むしろなぜAさんが先に花が「見えた」かである。Aさんは花を「みよう」としていたのだろうか。いやむしろ特別な場合を除けば、何気なく道を歩いていたAさんは、突然花が「みえた」のである。花に気づき、同時に花が目飛び込んできたのである。そうしたことによって、言ってみればAさんは知らず知らずのうちにAさんと花との生きられたかわりへと投げ込まれて(コミットして)しまったのである。実はBさんにしても同じことが起こっているのである。「みよう」と努力したことは確かであるが、「みえた」のは花に気づいたからである。そうして花を「みる」という行為が行われるのである。

日常的な体験においても上述のような「みる」と「みえる」の関係がある。こうした「みる」と「みえる」の関係は対人援助を専門的に行う者にとっては、街中を歩いているときに偶然に花を見

つけるといったようなことでは済まされないことである。保育者にとって乳幼児の発達が「みえる」かどうかは死活問題である。それは単に「みる」の延長線上に「みえる」があるといったような、視覚や視力といった機能的な問題が、「みえる」という体験的な問題に変容するといったことでは済まされない問題がある。その意味で保育者にとっては「みる」ということは「みえる」ことであり、「みえる」とは気づくことである。気づくこととしての「みえる」は保育者にとって、必要不可欠なことであり、勘や虫の知らせに頼ることではないのである。それは対人援助の専門職者としてその専門性を支える技術 (art)ⁱⁱであり、訓練されることである。

こうしたことから保育者にとっての「みえる」とは乳幼児の生きられた世界に気づくことであり、そうした気づきを専門的に行っていくということである。つまり、乳幼児の生きられた世界へとコミットすることがその専門性から要請されているといえる。

4. 「見える」こととしての保育へ向けて

上述したような意味で「みる」「みえる」を捉え返すならば、「みえる」こととしての保育とはどのように捉えられるだろうか。「みえる」という体験を専門的に深め、吟味していくことは当然、そこで扱われる人間関係自体を問い返すことでもある。保育における人間関係は大まかに次の3つの様相を持っているといえるだろう。①保育のための人間関係、②人間関係からの保育、③人間関係への保育の3つである。

通常われわれは特定領域における人間関係の意味を考える場合、その領域においてどのような人間関係が成立しているのかを吟味し、できればなるべくよい結果に結びつくような働きかけをする。たとえば子どもの人間関係を取り上げる際も同じである。子どもという領域を設定し、子ども同士の関係を吟味する。そうした上でみんなが仲良くすることを目指すのであれば、そのような働きかけをする。つまり、このことを保育に置き換えるならば、保育という領域において人間関係をいかに捉え、理解していくかが主な問題意識となる①。そこではもっぱら保育のためにという限定された世界の中での人間関係の手段的意味が問われることとなる。保育という領域の持つ目的に順ずる手段としての人間関係である。こうした人間関係のありようは、特定の領域にとどまる限りその領域の持つ意味が人間関係自体に先立つわけであるから、いたし方のないことである。しかしながら、保育の世界という限定された領域から出発するのではなく、人間の生きる存在論的な世界の現実である人間関係から保育という問題を捉えることもできる。つまり、保育とはある人間の一生の中で発達というきわめて重要な体験へとかかわる領域であることを思い起こせば、自ずと保育者がかかわる乳幼児が乳幼児であり続ける訳はなく、その乳幼児はたとえば保育所を卒業してもその乳幼児自身の人間関係を生きていくことは明らかである。その意味からすれば、保育という領域的な理解にのみとどまる人間関係とはかなり限定された理解でしかありえず、むしろ乳幼児の生きる人間関係からの保育②という理解が必要になるだろう。さらに言うならば、保育が乳幼児の生きられたかかわりへとコミットすることをその専門性として持つならば、人間関係を単なる人間の表層的な現象として捉えるのではなく、人間の生きる存在論的事実として捉える必要があるだろう。人間の生きる存在論的

現実としての人間関係から保育を捉えるならば保育という問題性は、乳幼児を人間関係へと拓いていくこととして表れてくる。乳幼児を人間関係へと拓いていくこととⁱⁱⁱして保育を捉えるのであれば、本論で述べてきたような「みえる」ということが保育という領域において重要な意味を持つということが理解されるだろう。

人間関係へと開いていくこととしての保育とは、人間の社会的事実性を支える保育である。つまり「みえる」ということにおいて問い返される保育の姿は保育者によって乳幼児が「する—される」関係としての保育ではなく、乳幼児の生きる世界を「みる—みえる」こととして捉え、そうした世界へと開くことへの支援としての保育であるといえるだろう。

引用参考文献・辞書事典類

- F. フロム＝ライヒマン 『人間関係の病理学』早坂泰次郎訳 誠信書房 1963
 M. メルロ＝ポンティ 『眼と精神』滝浦静雄 木田元訳 みすず書房 1966
 O. F. ボルノー 『問いへの教育』森田孝 大塚恵一訳 川島書店 1988
 早坂泰次郎 『人間関係学序説』 川島書店 1991
 木村敏 『偶然性の精神病理』 岩波現代文庫 2000
 『広辞苑』第5版

注

- i アクチュアリティということに対して、木村は同じく現実性や実在性と訳されるリアリティと比較しながら以下のように述べる。

「リアリティ」と「アクチュアリティ」という二つの用語は、本書の中でしばしば対概念として用いられている。辞書の上では両方とも「現実性」や「実在性」の訳語が当てられていて、実際にもかなり漫然と類語として理解されているようである。しかしそのラテン語の語源をたどると、リアリティのほうは「もの、事物」を意味する *res* から来ているし、アクチュアリティのほうは「行為、行動」を意味する *actio* に由来している（*actio* は「行う、行動する」を意味する *ago* の過去分詞から作られた）。つまり同じように「現実」とはいても、リアリティが現実を構成する事物の存在に関して、これを認識し確認する立場から言われているのに対して、これを認識し確認する立場から言われアクチュアリティは現実に向かってはたらきかける行為のはたらきそのものに関して言われることになる。（ドイツ語にはアクチュアリティに相当する語として *Wirklichkeit* がある。）

（『偶然性の精神病理』木村敏 岩波現代文庫 2000 p. 13）

- ii 対人援助の専門的技術の問題は、拙著「第3部 第3章 人間援助技術としてのソーシャルワークの発展に向けて」（『ソーシャルワークとケアワーク』大和田猛編著 中央法規 2004 所収）を参照。
- iii 人間関係へと開いていくことへの言及は、例えば、O. F. ボルノーはその著「問うことへの教育」（O. F. ボルノー 1988）の中で、「人間は問う存在である。」として、「人間は、彼が問うことにおいて手に入れる、絶えず新たな知識によって外延的な意味において絶え間なく拡大していくがゆえにのみ問う存在であるのではなくて、とりわけ次のことによって、すなわち、人間は自分の世界を、彼がその

なかに生きているいっさいの秩序とともに、したがってまた自己自身を、問いの中におく可能性をもっているがゆえに問う存在なのです。」(同上 p. 186) と述べている。このように人間は問う存在であることによって、その成長とともに「世界を彼の環境世界から何か自明なものとして受けとって」(同上) きたのである。しかし人間が問うことを続けることによって、その問いが外部から答えられるものではないことに気づく。そうして人間は「孤独な省察を余儀なくされ」(同上 p. 187) になるが、それは結局「自分の不毛な思案の圏内を蠢くばかり」(同上) になる。このことからボルノーの言う人間が問う存在であるという意味は、「人間が他の人間に自分の考えを提起し、持ち出すことができるということがすでに(問いの) 解明の本質的な手段」(同上 p. 188) を生きる存在であり、対話を生きる存在であることがわかる。